

国選択・茨城県指定無形民俗文化財

「龍ヶ崎の撞舞」 つくまい

龍ヶ崎の撞舞は、平成 11 年（1999）12 月 3 日に国選択無形民俗文化財（＝記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財）の選択を受け、平成 22 年 11 月 18 日に茨城県指定無形民俗文化財の指定を受けました。

- 実施場所：龍ヶ崎市根町「撞舞通り」
- 期 日：令和 4 年 7 月 24 日（日曜日）
- 時 間：夕刻（※おおよそ午後 6 時頃から始まります。）
- お問合せ先：龍ヶ崎市撞舞保存会（龍ヶ崎市役所 産業経済部 商工観光課内）
電話：0297-64-1111（代）
- 交通 電車：JR 常磐線龍ヶ崎市駅から関東鉄道竜ヶ崎線に乗り換え、
竜ヶ崎駅で下車、徒歩 10 分。
自動車：常磐自動車道つくば JCT から圏央道牛久阿見 IC を降りて、
県道 48 号土浦―龍ヶ崎線を龍ヶ崎方面に向かい約 15 分。
- 駐 車 場：龍ヶ崎市役所駐車場（無料）
- 内 容：

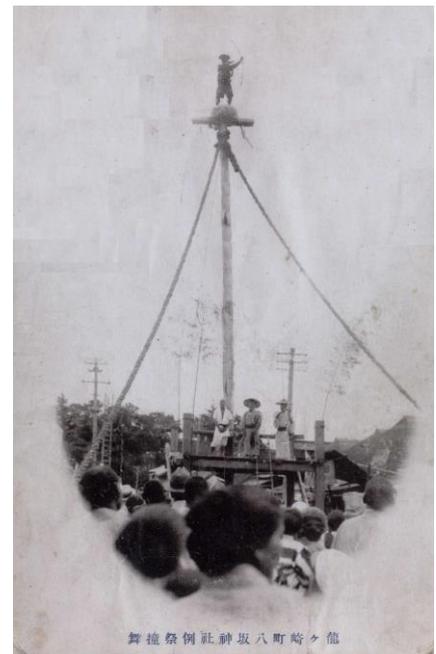
毎年 7 月下旬、龍ヶ崎市上町の八坂神社祇園祭が 3 日間にわたって行われます。その最終日の夕刻に根町の撞舞通りで、撞舞は披露されます。

撞舞は、笛や太鼓の囃子（貝原塚おこど囃子＝龍ヶ崎市指定無形民俗文化財）に合わせて、緑色の唐草模様の衣裳に雨蛙の面を被った舞男（まいおとこ）が高さ 14 メートルの撞柱（つくばしら）に登ります。柱の頂上はサンダワラ（棧俵＝米俵の両端に当てる丸く藁で作った蓋）を 120 枚重ねて、白い布で覆った円座（えんざ）が作られ、その上に舞男が立ち、四方に向かって弓を引いて矢を放ちます。続いて、逆立ちや仰向けになり、柱に張った 3 本綱のうち東側に張った綱の上で両手を広げて滑空する等の妙技を尽くし、再び綱をよじ登り、柱に戻って柱を下りて舞は終了します。

撞舞は、雨乞いや五穀豊穡（ごこくほうじょう）、または疫病除けの意味があると言われていています。舞男が放った矢を拾った人は、災厄を 1 年間免れると言われていています。

撞舞の古い資料は、寛政 4 年（1792）の『天王社祭礼式録帳』の中に「上町半助」という舞男の装束に関する記載があるほか、舞男が被った古い面に「天王町 安政二年（1855）乙卯六月吉日 上辻中下組」と記された 2 点があります。

しかし、これ以前から撞舞は行われていたと考えられ、400 年以上前から行われていたとも伝えられています。しかし、起源については定かではありません。



古い撞舞の絵葉書
（岡澤英夫氏蔵）

1. 撞舞の源流

柱や綱の上で、雨蛙の姿をした舞男がさまざまな妙技を行う伝統芸能です。

この舞には、雨乞いや五穀豊穰（＝豊作を祈ること）、疫病除け等の願いが込められています。

撞舞は奈良時代に中国から伝わった散楽（軽業・奇術・滑稽物真似に音楽を伴った雑多な芸能）が神楽（神社等で神に奉納する芸能）となり、時代とともに地方に伝えられ、庶民生活と密着して変化したものと考えられています。

龍ヶ崎の場合は、水田地帯であり雨乞いや五穀豊穰等の人々の願いが付け加えられ、現在の撞舞になったと考えられています。

また、室町時代から江戸時代初期に流行った蜘蛛舞（くもまい）によく似ているとされ、17世紀に描かれた『四条河原風俗図巻』（サントリー美術館蔵）や『四条河原遊楽図屏風』（ボストン美術館蔵）、『無款津島神社祭礼図屏風』（大英博物館蔵）等に、高い柱から綱を張った上で、顔の前に赤い布、後ろにはギザギザの布を垂らした獅子姿の舞人が両手を広げて滑空する様子が描かれています。

これが龍ヶ崎の撞舞とよく似ていることから、江戸時代前期には龍ヶ崎でも行われていたと推測されます。

2. 撞柱

高さ 14mの柱は、紺と白の木綿布で覆われています。柱は龍の姿を表していると考えられ、東側にあたる紺布は龍の背を、西側の白布は龍の腹を表していると考えられます。

柱の上部に横木が組まれ、その上に円座が置かれます。その頂上に舞男が立ち弓を放ち、逆立ち等を披露します。円座は直径 120cm・高さ 85cmほどの大きさで、サンダワラ 120個を重ねて作られ白布で覆われています。

円座の下の横木には、北側に轡（くつわ＝馬の口にくわえさせ、手綱（たづな）を着けるための金具）、南側に馬の尾と言われる紺染めの麻糸の房が下げられることから、柱の上部は馬の背を表しているともいわれます。

3. 舞男

衣装は緑色の唐草模様の筒袖襦袢（つつそでじゅばん）に裁着袴（たっつけばかま）、雨蛙の面を頭に被り、赤い布を顔の前に垂らし、頭の後ろには色とりどりの紙を張り付けた白い布（＝鱗（うろこ）に見立てた布）を垂らします。

この雨蛙は、『雨蛙のフク伝説』と関係があると考えられています。「フクは龍ヶ崎に住み、洪水の時には水を飲み込み、日照りの時には水を吐き出して、雨を降らせ農民を助けたという」

巨大な力エルの伝説です。舞男は、龍の背中を蛙が這い上がる様子を表し、雨乞いをしているのだともいわれます。



撞柱と舞台

4. 矢を射る動作

舞男は円座の上に立ち、東西南北に弓で矢を放ちます。これには、疫病除け・悪魔除けの意味があります。放たれた矢を手に入れた人は、1年間は災厄を免れ、健康と安全が約束されるといわれています。かつては民家の屋根が茅葺（かやぶき）だった時代に、この矢が刺さった家は1年間の家内安全と繁栄が約束されるといわれました。

5. 撞舞はいつごろから行われているか

16世紀後半には行われていたと考えられます。

八坂神社は上町に鎮座していますが、戦国時代の永禄11年（1568）、龍ヶ崎城主であった土岐胤倫（たねとも）によって創建された頃は、現在の祇園祭で根町の御仮屋が置かれる辺りに御社（おやしろ）が在ったと考えられています。

そのため八坂神社が上町に移ってからも撞舞は、根町で行われていると考えられています。

また、資料としては、寛政4年（1792）の『天王社祭礼式録帳』に舞男の装束に関する記載があります。この他に「天王町乙卯安政二年六月吉日上辻中下組」と記載がある布が付いた舞男が被る面の写真があります。安政2年（1855）の記載がある面は、この時に新調したのか修復したものか、詳細はわかりませんが、昭和44年（1969）に修理されるまで114年間以上使われたこととなります。

寛政4年の舞男の装束に関する資料があることから、少なくとも約230年前から撞舞は行われていたこととなります。

6. 撞舞は龍ヶ崎のほかにもあるのか

龍ヶ崎のほかに千葉県野田市・旭市・多古町、秋田県の潟上市（かたがみし）で行われています。

その名称は、野田市「津久舞」、旭市「つく舞、或いはエンヤーホー（＝陰陽法）」、多古町「しいかご舞」と呼ばれ、いずれも国選択無形民俗文化財に選択されています。舞や舞人の衣裳、面等に違いはあるものの、舞人が高い柱に登り舞を演じるという形態は、龍ヶ崎の撞舞と似ています。特に野田市は、昭和8年（1933）に津久舞を復活させる際に、龍ヶ崎から舞男をはじめ、お手伝いに出向いたことから、舞はよく似ています。

また、お隣の北相馬郡利根町布川の布川神社でも、明治43年（1910）まで「ツクマイ」が行われていた記録があり、安政2年に布川の医師赤松宗旦が著した『利根川図志』「ツクマイ図」に蛙の面を被った舞人の姿と舟型の舞台が描かれています。

潟上市の蜘蛛舞は、遠方であることから撞舞との関連が薄いように考えられますが、舟上で舞を披露することや「ツクマイ図」に舟型の舞台が描かれていることに加え、江戸時代に流行した蜘蛛舞の名称から同類であると考えられます。

このほかにも江戸時代には、現在の千葉県のいすみ市万木、市原市五井、柏市箕輪、東京都葛飾区でも行われていたという記録が残っています。



舞男（谷本仁氏）の衣裳



『利根川図志』ツクマイ図

7. 記録からわかる歴代の舞男

舞男を務めた方のお名前は 9 名が分かっています。これに寛政 4 年の上町半助を加えても 10 名です。根町の撞舞通りの歩道には、記録から分かる歴代の舞男のお名前のプレートが埋め込まれています。

① 東郷 辰五郎

昭和 25 年（1950）に撞舞が復活・再開した際に舞男を務め、70 歳近くまで舞を演じたとされています。また、野田市の津久舞の舞手の重次郎を戦前の昭和 8 年（1933）に務めたことも記録からわかっています。

② 瀬ノ尾 重男

10 数年以上、舞男を務めました。野田市の津久舞が昭和 29 年（1954）に再開された際に重次郎を務めています。昭和 43 年頃に交通事故によるケガのため引退しました。このため、龍ヶ崎の撞舞と野田の津久舞は数年間、途絶えました。

③ 3 人の舞男（小泉勝・飯野幸一・飯島英雄）

昭和 48 年（1973）の再度の復活の時には、舞男の役目を正式に龍ヶ崎鳶職組合に依頼して、3 人が練習しました。そのため 3 人の舞男が代わる代わる演技をするという特殊な方法をとりました。

④ 北沢 久

瀬ノ尾さんに直接指導を受けて、昭和 49 年（1974）から昭和 54 年（1979）まで舞男を務めています。この方も野田市の重次郎を 4 回務めています。

⑤ 藍澤 正夫

昭和 55 年（1980）から平成元年（1989）に舞男を務め、平成 10 年（1998）にも再度務めています。

⑥ 谷本 仁

平成 2 年（1990）から現在まで舞男を務めています。

平成 10 年はケガのため、先代の藍澤さんが舞男を務めました。

平成 20 年（2008）からは、後継者の大石さんと 2 人で舞を披露しています。

⑦ 大石 浩司

谷本さん指導のもと 5 年間の修業を積み、平成 20 年から舞を披露しています。



お問合せ先 〒301-0004 茨城県龍ヶ崎市馴馬町 2488 番地
龍ヶ崎市歴史民俗資料館

TEL0297-64-6227/rekishi@city.ryugasaki.lg.jp